



## 「褒（ほ）める」と「認める」の違い!?

大人の側に見れば、この両者の違いはあつてないようなものでしょう。「認めてあげようと思って、褒めている」「褒めることは、そのまま認めること」という感覚なのではないでしょうか。そして、多くの子どもも、そんな感じで受け止めていることでしょう。とりわけ、年齢が低いほど、その差はないに等しいに違いありません。

しかし、「認めてほしい」「認めてもらいたい」と強く思っている子どもには、そんな大人の言い分は通じないかもしれません。中には、「褒められてもうれしくない」といった子どもも出てきたりするのです。一体、何が違うのでしょうか。大人が子どもを「褒める」ときは、一般に大人の基準や水準で「褒める」ことが多いように思われます。そして、大人の側の基準で一定の水準に達した、水準を超えたと評価するのが「褒める」という行為と言えます。反対に言えば、水準に達しない場合には「頑張りなさい」と叱咤激励することはあっても、褒めることは稀でしょう。



それに対して、子どもが「認めてもらいたい」ときというのは、一般に子どもの基準や水準で「褒められたい」のではないのでしょうか。子どもなりのこだわりで努力したり、工夫したりしたことを「認められたい」のです。だから、大人の考えた基準に達していなくとも「褒めてほしい」と考えたり、大人の考えた水準に到達して「褒められた」場合でさえ、大人の基準とは異なる子どもの基準でも「褒めてほしい」と考えたりするわけです。だから、自分がさほど努力もしていない、自分の功績ではないことを「皆さん、よく頑張りましたね」と全員を一括りにして褒められても、さほどうれしくもなく、励みにもならないのかもしれませんが。子どもの実際の行動と向き合うことなく、表面的にお世辞を言ったり、ちやほやしたりしても、子どもの「自己有用感」はおろか「自尊感情」すら高めない可能性が高いのです。

行事に取り組む、学習に取り組む際などに、子ども自身に目標や工夫する点、努力する点などを考えさせておき、その基準に沿ってどこまで達成できたのかを評価することが「認める」という行為では重要になります。それが、「自己有用感」を育むのです。単に良かった・悪かったと評価するだけの「褒める」では、「自尊感情」を育むことはできても、「自己有用感」を育むことにはなりにくいのです。

例えば、「振り返りシート」を用いているのであれば、児童生徒の振り返りに対して、ただ「頑張ったね」とだけ書くのではなく、その児童生徒が「こだわった」「見てほしかった」点に触れた記述を返しましょう。そのためにも、一人一人をきちんと見るのが大切です。